

ICD 頻回作動を伴う Brugada 症候群症例における心外膜 Substrate Ablation : 周術期および慢性期の特異的心電図変化

藤野紀之 木下利雄 和田 遼 矢野健介
秋津克哉 小池秀樹 篠原正哉 湯澤ひとみ
池田隆徳

症例は 30 歳男性。生来健康であったが 2009 年 8 月に心肺停止で搬送され、ICD 植込みとなった。来院当初の心電図は、典型的な Brugada 型波形であったが、途中から完全右脚ブロックを伴う波形へと変化した。後に遺伝子異常も発覚した。ベプリジルにて心室細動 (VF) は減少したが、2011 年 5 月頃より ICD が頻回に作動するようになった。植込み後、夏場を中心に計 17 回 VF が捕捉されたため、2016 年 1 月に心外膜の substrate ablation を施行した。右室心外膜側に late potential (LP) などの異常遅延電位が多数記録され、同部位へ substrate ablation を行った。3 回目のマッピング後にすべての LP 消失を確認し、誘発不能のため終了した。なお、心内膜側に異常電位は存在せず、焼灼はしていない。周術期、通電直後から V₂ 誘導で ST 上昇し、焼灼中止にて速やかに回復する現象が 12 カ所で確認された。この部位には冠動脈は存在せず、いずれも LP の近傍に存在した。アブレーション前に比し、焼灼直後から前胸部誘導の心電図は改善したものの、過去の報告のように 12 誘導心電図や加算平均心電図は正常化していない。しかしながら、無投薬下に 4 年間一度も作動なく順調に経過している。治療中の特異的な ST 上昇、治療後の経時的な 12 誘導心電図と加算平均心電図の興味ある変化を示したため (図 1, 2)、考察を交えて報告する。

Keywords

- Brugada 症候群
- 心外膜アブレーション
- 心電図
- 加算平均心電図

東邦大学大学院医学研究科循環器内科学
(〒143-8540 東京都大田区大森西 5-21-16)

The Case of Substrate-Based Epicardial Ablation in a Patient with Brugada Syndrome with Frequent ICD Shock : Specific Electrocardiogram Change During Follow-Up

Tadashi Fujino, Toshio Kinoshita, Ryo Wada, Kensuke Yano, Katsuya Akitsu, Hideki Koike, Masaya Shinohara, Hitomi Yuzawa, Takanori Ikeda

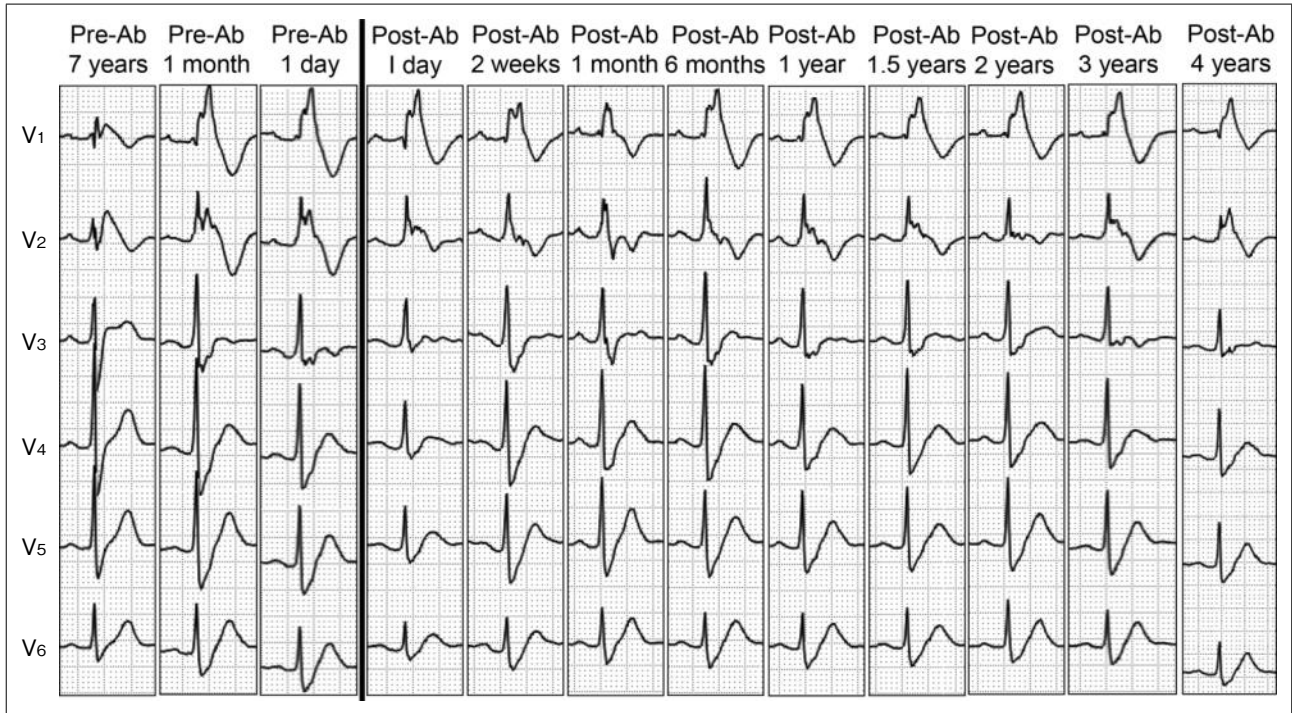


図1 治療前後の12誘導心電図胸部誘導の経時的変化

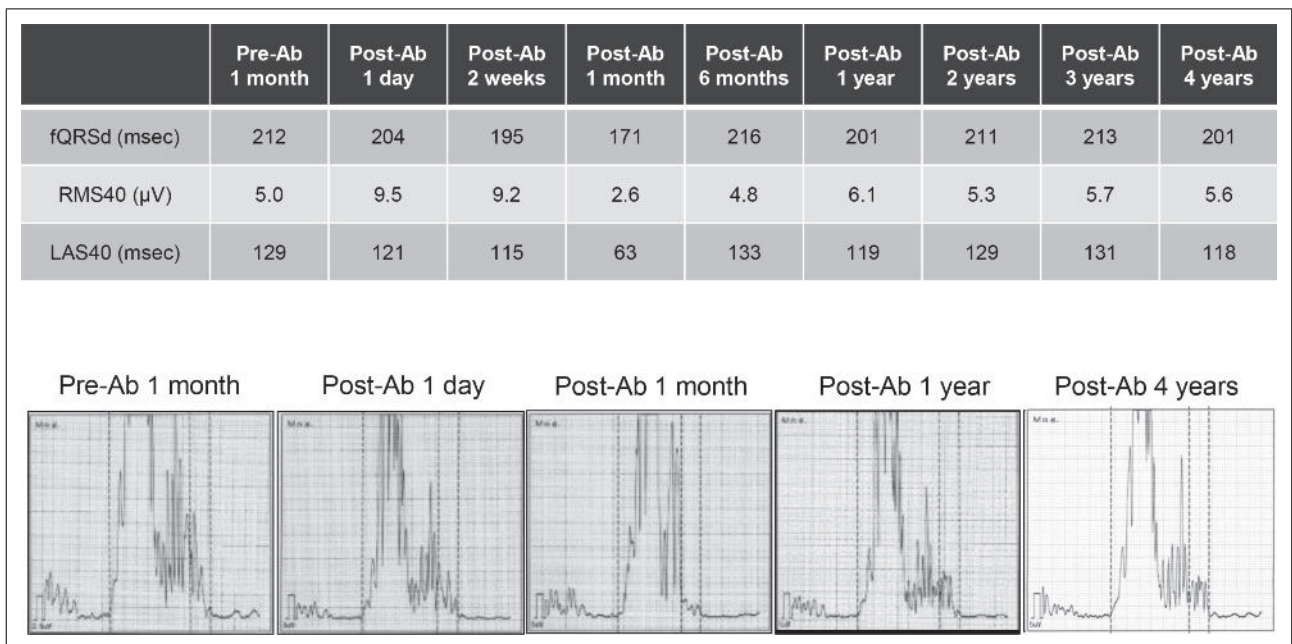


図2 アブレーション後の加算平均心電図の経時的変化